ベストピア Bestopia
第446号
2024年04月号
bestopia.jp
パリ通信
第148号

ひかり号8号車11番A席の思い出(1)

この列車の切符が送られてきたのは今から28年前である。(平成8年のこと)
その8月の初めの午前であった。電話があった。電話をとった職員が
「所長電話です。大阪の人のようです」私はどこからだと聞いたが、職員は困った顔で「所長でないとダメだと言ってます」と言う。その表情から私が出なければならないと感じ電話を個室に回した。
電話の主X氏との対応は次の通り

X氏「税理士の小原さんかね。」
私「はいそうです。どちら様ですか」
X氏「土地を売りたいのだが税金のことであんたに相談がある。大阪に来てほしい。急ぐ。」
私「大阪には有能な税理士がいますから紹介します。私は小田原の税理士です。
X氏「分かっとる。あんたでないとダメなのだ。8月11日は空いとるか？」
私「空いてはいますが、私では役に立たないと思うので紹介しました。」
X氏「あんたでないとダメなのだ。新幹線の切符をグリーン車の席で送る。」
私「切符は自分で買えるから結構です。」
X氏「いや、礼儀というものがある。こちらから送る。それに乗ってきて欲しい」
私「場所はどこですか？」
X氏「新大阪駅の近くだが、迎えの者を遣わすから心配はいらない。」

話のトーンはほぼ命令形、断れないので承諾したら数日後にグリーン車往復切符が送られてきた
切符の内容は「8月11日ひかり637号8号車11番A席（新大阪着12時30分頃）」、帰りは「同日ひかり654号新大阪発14時16分、8号車11番D席」である。新大阪滞在時間わずか１時間40分である。電話のトーンから覚悟は決めていたが「どんな難問が持ちかけられるのだろうか。どんな案件であれ断る。応対に注意する」

前日の午後X氏の秘書から電話がかかってきた。
秘書「新大阪駅のホーム8号車と9号車の出口から降りるように。そこにお迎えがいます。
　　日当をお支払いしますので印鑑、三文印ではなく、職印を持参するように。」と指示があった。

いよいよ、これははまってしまったかもしれないと思ったが恐怖感はなかった。未知の世界だからどんなところだろうとの心持ちで旅に出かける高揚感さえあった。

8月11日は私の誕生日である。グリーン車８号車11号Aは出来すぎである。ここまで調べられている。どんな難問が降りかかってくるか。少し疑念が出始めたがすでに列車が出発した。
新大阪駅、指定通りの出口から降りると予告通り二人のサングラスの男、二人とも華奢というかスマートに黒服を着ていた。二人に挟まれるようにして構内を出て駐車場へ向かった。大男に挟まれるように歩いていく小さな老人を周りの人はよけるように眺めなが目ていた。迎車は駐車場ではなく乗降場に止まっていた。黒いベンツである。私たちが近づくとドアが開いた。乗っていた運転手は車から降りた。そして私を誘導した一人が運転席にもう一人が助手席に座った。
私はもう一人が後の私の席に座ると思って奥の席に移動した時、「後はあなた一人だからリラックスしてください」と低い声で言われた。もう一人の役割は車の駐車する場の確保だけであったようだ。「近くですか」と私は尋ねた。「10分位です。」と助手席の人が答えた。
どこへ行くのか10分位でと思いながら車窓を見ていると駅から遠のくのでなくぐるぐる回っているようだ。助手席から「帰りも見送るから心配はいらない。」と声があった。
ベンツがあるビルの前に止まった。
助手席の男が降りて私のためにドアを開けてくれ入り口に案内してくれた。

オフィスのドアが開いた壁面に「有名になりつつあった卓球選手のポスターが一枚だけ掛かっていた」内側のドアが開いた。通路はレードカーペットであった。そこにモデルのような美女が三人立っており笑顔で迎えてくれた。
私も笑顔で答えた。怖くはなかった。何が始まるのかという好奇心の方が強かった。
応接室に通されソファの椅子に案内された。冷房がよく聞いており寒かった。
まもなく秘書の一人がお茶を出しに入ってきた。よく訓練された作法であると感心した。
会話はしなかった。一言「ありがとう」と言った。

X氏はなかなか現れなかった。私は監視されていると感じていたので、微動だにしなかった。
お茶はもともと飲めないので手は付けていない。10分たっても誰も来ない。ますます監視されている。冷ややかな空気を感じる。動いてはいけない。20分が経ったが誰も来ない。シーンという冷たい感じがする。ともかく現れるまで我慢だ。帰りの切符は14時16分だと分かっていた。
30分位が経過した時X氏らしき人が現れた。無言で彼は私の直角の彼の位置に座った。
何も言わない。挨拶もない。私は自己紹介して名刺を渡した。彼は名刺を差し出さなかった。
無言が続く。あまり長くなるのは嫌だったので、私は口を切った「卓球の某某さんを応援しているのですね。」「うん」と短い声があった。「実は、私も〇〇選手と懇意で某某さんのことをよく聞いています。有望視されていますね。」「うん」ーーーーーーーーーーーーーーーーーー。

しばらくしてX氏は口を開いた。「聞きたいことはーーーーーーーーーだ」と質問してきた。呆気に取られる質問であった。答えは業界では常識の範囲であった。それを答えると「そうか。分かった」
秘書が呼ばれた。先ほどとは違った少し年齢を重ねた人が書類らしきものを持って入ってきた。
よく訓練されていた。「これは今日の日当だ。これはその領収書だ。サインして印を押して」とX氏は言った。朱肉が用意されていた。私は言われるようにした。秘書はその領収書を持って席を立った。「ご質問はそれだけですか」と言おうとしたがやめた。彼の目的が分からなかった。

暫くしてX氏は「ご苦労だった。今日は終わりだ。先ほどの者たちが駅まで送る。」

13時30分位であったと思う。同じように運転して同じようにホームまで送ってくれて列車が動き出すまで立っていた。

帰りの新幹線の中で考えた。「何故小田原の私を選んだのか？」いくら考えても分からない。
目的は何であったのかも分からない。今後何が起きるのだろうか？きみが悪かった。
10年を過ぎてもこの関係者からは連絡はなかった。しかし。目的はあった。あっと驚く目的があった。　　次号に続く。

以下に二つの興味深い記事を引用します。

天声人語　上を向いて歩こう

　もしも宇宙人がいまの地球を見たら、人類とは何とも不思議な生き物だと思うに違いない。捨てるほどの食料があっても、飢餓に苦しむ人がいる。互いに争い、傷つけあう。さらに言えば、遠くを見る目があるのに、下を向いて歩き、ぶつかりあっている▼目の前の人をよけるより、大事なことってなんですか？――。少し前、近所の駅でそんな標語を見た。「歩きスマホ」による事故は相変わらず絶えないらしい。東京消防庁の管内では、過去５年間に１５８人が救急搬送されたという。年代別では５０代がトップだとか▼中国語では「低頭族」とも呼ばれる。頭を下げ、スマホに見入る人たちを揶揄（やゆ）する言葉だ。かつて皇帝に謁見（えっけん）する際、「三跪九叩頭（さんききゅうこうとう）の礼」を求めた国である。現代の皇帝はスマホなのだとの痛烈な皮肉さえ感じられる▼そもそも不器用な筆者は、歩きスマホをしようにもできない。文字を打ちながら、スイスイと歩く人には脱帽である。どこかに別の目があるのか。はてさて人類は新たな進化をとげたのか。そんな冗談も言いたくなる▼一刻を争って見なければならない画面など、めったにあるまい。なぜスマホを見続けるのか。おそらくそこには、歴々の哲学者たちを悩ませてきた「退屈」という問題があるのだろう▼かの李白は詠んだ。〈頭（こうべ）を挙げて山月を望み、頭を低（た）れて故郷を思う〉。しばしスマホをカバンにしまい、わが町を眺めてみたい。春風やさしく、桜の花も咲き始めている。上を向いて、歩こう。2024年3月31日引用

森もり里さと海うみから

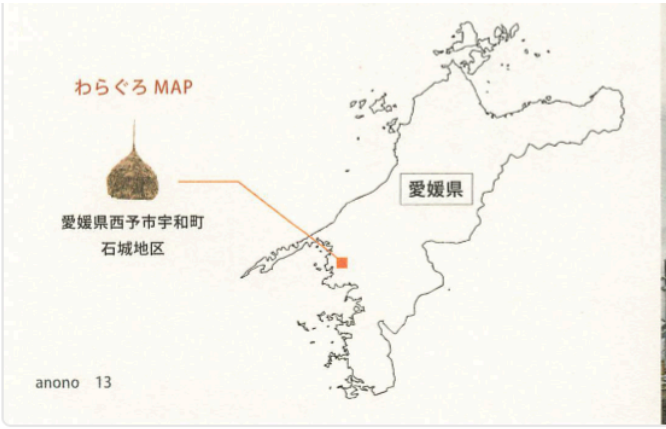
香川県高松市三豊町に本社がる建設会社・（株）菅　組の季刊誌「あののお」（讃岐の方言で『あのね』という呼びかけ言葉）第67号より引用する記事です。この季刊誌には建設関係の貴重な資料が満載されている。同時に地域の文化を発信しておられる。最近号を紹介します。記事の筆者は同社の代表取締役社長さんです。

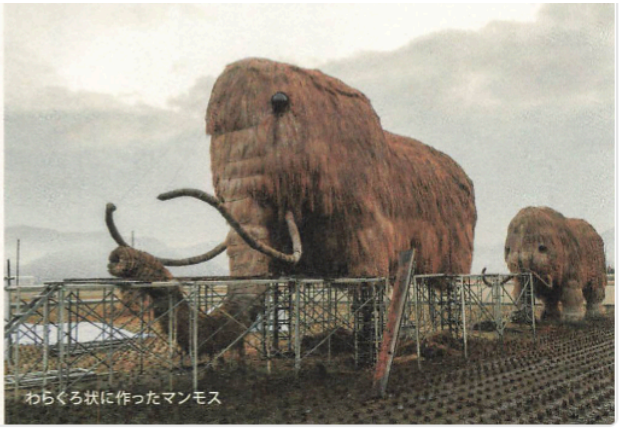
文・写真：菅 徹夫

宇和のわらぐろ

愛媛県西予市に「わらぐろ」と呼ばれるものがつくりだす農村風景があります。「わらぐろ」とは、この地に古くから続く、稲わらを乾燥貯蔵するために積まれた三角ぼうしのような造型のこと。秋の脱穀後、翌年の春まで田んぼに安置して藁を保管します。乾燥後の藁はわら細工や牛の餌などに使用されているようです。運搬・移動させると場所もかさばって非効率なため、現地で積み上げて保管するという生活の智恵なのだそうです。「わらぐろ」はこの地域の農村文化の象徴であり、独自の原風景をもつくりだしています。稲作という産業から生まれた副産物としての稲わらを有効利用するまでの約半年間、周辺の田園風景とともに地域の風物詩となる。なんと美しい……。そこには現代社会が忘れかけている、「ゆっくりとした時間」が流れる余裕のようなものさえ感じます。

「わらぐろ」の数は機械化とともに減少しているようですが、地域独特の文化的景観として後生に残してほしいものです。できれば「わらぐろ」を残そうと意図しなくても、自然な農業生産のプロセスや結果として無理なく「わらぐろ」が残っていく、そんな効率最優先ではない社会システムが再生されることを願いたいものです。時代を巻き戻すということではなく、未来を見据えて価値観の方向性をそちらにシフトしていく。このようなあり方こそ、今求められていることではないでしょうか。




わらぐろ状に作ったマンモス

パリ通信・第148号

オルセー美術館「パリ1874年」展

4月に入り「復活祭の学期休み」が始まり晴れて気持ち良い季節になった。印象派絵画の誕生を告げる1874年から150周年を記念し、オルセー美術館で「パリ1874年」展(2024年3月26日から7月14日まで)が始まった。
今から150年前の1874年4月15日第1回「印象派展」がパリで開催された。モネ、ルノワール、ドガ、モリゾー、ピサロ、セザンヌ、シスレーらが集まり、写真家ナダールの旧アトリエ(35番地 Boulevard des Capucines)を借りて各自作品を持ち込み販売するという新しい形態の作品展である。

明るい光に満ちた絵画、瞬時に変化し移りゆくモチーフを素早いタッチで捉えようとする新しい芸術家たちの新しい絵画が生まれる春となった。当時のサロン、絵画展ではボザールの審査員が出展作品を審査し、神話や歴史的事実をテーマにアトリエで入念に描かれた伝統的な絵画が評価され、当選した作品には賞が与えられた。

こうした権威的でアカデミックは王道を離れた形でクロード・モネ、オーギュスト・ルノワール、カミーユ・ピサロが新しい組合形式の会社組織を結成し、サロンや公式展示のシステムを必要としない自由参加の展示を始めたのである。現在「印象派」として高く評価される画家たちも当時は少数派であり、評価は低く作品はほとんど売れず、ナダールのアトリエ賃貸料さえも支払えない赤字で終わり、「印象派」という名称は軽蔑的な意味で使われたのだった。

1870年にオーストリア帝国との「普仏戦争」で疲弊したパリ、1871年にはパリ・コンミューンでパリは破壊された。1871年から県知事オスマン男爵によってパリ大改造が始まる。大通りが整備され、駅が造られ、公園などの緑地が生まれ、1873年の火災で消失した旧オペラ座(ル・ペルチエ通り12番地)に代わり、現在のオペラ座(ガルニエ)が文化の象徴として建造された。大都市計画による新しいパリの誕生である。

ブルジョワ層が急速に台頭するこの時代、画家たちに求められるものも彼らの豊かな生活、近代化された風景であり、印象派の画家たちの明るい生き生きとした絵画は新しい時代の到来とと

もに生き、反映することになる。1860年代からコロー、クールベ、ドービニー、ヨンキント、ブーダンと言った彼らの先駆者たちが開いた道でもあった。
1874年4月15日から5月15日までの1ヶ月間の作品展は、審査員の選別もなく、31名が各自の判断で持ち込んだ計約200点の作品を販売目的に展示するというこれまでにない形態で行われたのである。11月のル・アーヴル港に昇るクロード・モネ「印象、①日の出」(1872年作)、②「けしの花」(1873年)を始め、③オーギュスト・ルノワール「パリジエンヌ」(1874年)、④エドワール・マネ「鉄道」(1873年)、⑤ベルト・モリゾー「かくれんぼ」(1873年)など近代化された街で展開される新しいブルジョワ層の生活風景、モードや風俗、建造物が描かれている。
20世紀になるまで彼らの作品は評価されず、フランス国内より先にアメリカやイギリスで価値が認められる結果となった。
1874年から始まる彼らの作品展は1886年まで続き、76年、77年、79年、80年、81年、82年、86年の8回が実施された。経済的に報われない彼らを支えたのがギュスターヴ・カイユボットで作品展の費用を提供し、メセナを集め、作品購入を続け経済支援を行う。海外に売られていく作品が多い中、カイユボットが購入し国に寄贈したお陰で多くの優れた作品がフランス国内に留まることになる。交友関係で結ばれ、特別なマニフェストを掲げない印象派の画家たちは作品展の回数を重ねるに従い、セザンヌは色や光よりも構図や抽象性へと向かったように、夫々が進む道を選び印象派展は自然解体する。ただ一人カミーユ・ピサロだけが全回に出展した。

今や世界中が絶賛する印象派だが、同時代の人々の関心は薄く時間差を以って評価されたことは今私たちの時代にも充分にあり得ることだろう。生きている時代の価値を見つけることは本当に難しいと思う。